

## 一橋大学最終講義

### 「これまでの仕事、これからの仕事」

清水昭俊\*

最終講義なんていうのは他人事だと思っておりましてけれども、いつの間にか私の番が回ってきました、こういう場になってみて、こんなに気恥ずかしいものだとは思ってもみませんでした。みなさんに来ていただいて、本当にお礼を申し上げます。

先日研究会がありまして、たまたま神戸大の須藤さん<sup>1</sup>と話す機会があったんですけども、その時に彼が、最終講義には二つのパターンがあって、自分の今までしてきたことを話す人と、それから、これから何をするかを話す人とがいると言いますので、それはちょうどいいと思ひまして、私はその双方をするんだと応えたんですけども、今日はそういう意味で、これまでしてきたことと、これからしようと思っていることを少しお話ししたいと思います。

振り返ってみて、私は教訓話みたいなことは一切できないのですけれども、一つだけ言えるのは、研究 30 年間やっているわけで、10 年をサイクルとすると 3 回 10 年代を繰り返していったこととなります。はじめのうちは、私はその同じ 10 年代の中にいると思っていたのですが、2 周目くらいになると少し遅れているなということが自覚されまして、3 度目くらいになるともう周回遅れ、私は未だに 20 世紀に生きているわけですね。要するに、なかなか時代に追いついていくというのは難しい、そういう時代にだんだん遅れていく姿を見ていただけたらいいのではないかと思います。今の若い人は恐らくそんな感覚はないと思いますが、そのうちにきっとそうなるかと（笑）。その時にですね、「ああ、清水さん、そういうこと言ってた」みたいに思い出してもらえればいいんじゃないかと思っています。

#### 出帆と逆風

私は、大学に入ったのは理科系でして、人類学者の中に理科系の方は結構多いのですが、でも理科系の方は理科系も文科系もやるという両刀遣いといいますか、万能な人が多いんですけども、私はそういうタイプの理科系ではありませんでした。例えば大学受験の際も、数学でかなり点がとれるんですが、国語と英語で全然とれない（笑）そういう人間でした。ですから、人類学にきたというのは、一種、迷い込んだような人間なのですが、そ

---

\* 2006 年 3 月 31 日をもって、一橋大学大学院社会学研究科教授を退職。

<sup>1</sup> 須藤健一氏、神戸大学教授。

ういう人間にとって、この時期は、1968年ですが、非常に大きなものがありました。私が大学院（博士課程）2年の時だったのですが、今から考えてみればこういう経験があったのは一種の不幸だったとは思いますが、しかしこれがなければ多分人類学でもやってこられなかったのではないかと思う、そういう経験をしているわけです。

この『東南アジアの民族と文化』は小さな雑誌で、亡くなった大林先生<sup>2</sup>が東大の院生を集めて「東南アジア研究会」というのをつくっていたのですが、不定期にこういう雑誌を刊行していました。私は1968年の5月に、「人類学的調査についてのノート」<sup>3</sup>という文章をここに書いております。ちなみにこの雑誌（の論文）には当時の院生たちの意欲的な姿勢が見えると思います。みなさんの文章は非常にこなれていて、このまま商業的な雑誌に載せても十分通るようないい文章で書いています。それに対して私のは非常に硬いですね。

この時に何を書いたのかといいますが、たまたまこの春先、一週間もなかったのですが、友人の河野さん<sup>4</sup>に紹介して頂いて、静内のアイヌの家々を訪ねる経験をしました。その時に、もろに、差別されているアイヌの人たちが差別する人間に対してどういう態度をもっているのかというのを経験したのです。「調査にきた」といって訪ねていくと、「お前はアイヌ学者か？」、「アイヌ学者というのは我々から文化を奪っていったんだ」ということをもろに言われまして、そこで考えて書いたのがこの文章です。

今読んでみますと、ここには植民地状況についても書いてあります。時代がベトナム戦争のさなかで、アメリカでは学園紛争です、人類学者たちが、ベトナム戦争に協力する人類学者について告発したり再考したりする、そういう議論をしまして、その論文が *Current anthropology* に載っていました。そういうのも少し読んで、調査と人類学との関係、それから調査とその調査の時の状況の関係を深刻に考えていたことが、この論文で窥えます。

## 人類学をすること、闘争すること

この1968年の夏に、日本の人類学会と民族学会が国際会議を開催しました。世界中から学者が集まってくるので、旅行社がいくつかレクリエーションのプログラムを予告していたのですが、その中に北海道のアイヌ村旅行みたいなのがありました。正確な言葉はあとで資料で確認する必要がありますが、「目の前に原始民族を見ることができます」といった謳い文句でアイヌツアーを宣伝していたんです<sup>5</sup>。それを見て私もけしからんと思いま

<sup>2</sup> 大林太良氏、東京大学名誉教授、元北方民族博物館長。

<sup>3</sup> 「人類学的調査についてのノート」『東南アジアの民族と文化』2, 49-64. 東京:東京大学東南アジア研究会。

<sup>4</sup> 河野本道氏、旭川市博物館。

<sup>5</sup> 旅行社が参加者に送った *Your Travel Guide* では、「Full-day excursion to isolated Ainu aboriginal ethnic groups. You will be most interested in their marriage system, unique

して、組織委員会に手紙を送り、「こんなことを人類学者がやっているのか？」ということに抗議したわけです<sup>6</sup>。また、河野さんたちと一緒に声明文を送ったりするなど、いくつか反対運動をしました。私たちへの返答では、アイヌツアーは中止にするということでした<sup>7</sup>。

それだけでなく、また学内でも教官と院生との間に軋轢があったりしまして、その年の10月に、その当時の東大闘争ですが、我々はちょっと遅れた形ででしたが、ストライキをやりました。翌年69年の1月に機動隊が東大に入り、東大闘争はだんだんと制圧されていって、春にはほぼどこでも授業を再開していました。が、我々は少しがんばりまして(笑)もう一年ストライキを続けました。まあ、授業がなかったということだけで、先生方は個別に指導なんかはしていたようですが、とにかく形の上でストライキはずっと続けていたわけですね。

69年にその学生たちの、まあ私たちは「文人闘争」と言っていましたけれども、闘争に関連してですね、民族学会の研究大会で民博設立の基本方針の説明がありました。予告されていたからそこに行きまして、その会議で、そこにおられる渡邊欣雄さん<sup>8</sup>も一緒だったと思うんですけども(笑) 佐々木高明さん<sup>9</sup>が議長で学会側は祖父江先生<sup>10</sup>が答弁に立って、あるいは説明に立って、私や他の人たちが「おかしい」って糾弾の質問をして、かなり長いあいだ議論をしたことがあります。

## グラウンド・ゼロ

そのような行動をしていたのですが、しかしまあ(笑) 大学の 学生と院生というのは立場を替えてみるとよく分かるんですけども やっぱり力関係は全く違ってまして、大学から、時限が来たから年度を進行させる、年度(在学年数)のない人たちは手続きをとるように、というようなことをされてくると、だんだん院生側も崩れていくわけで、当然ストライキとってがんばるわけにはいかなくなっていくます。それで、1970年の3月に「スト解体宣言」というのを書きまして、ストライキはやめました。

---

spiritual life, etc.」(p.13)、訪問先の村は「Open to all the visitor's inspection」(p.14)などと記述していた。

<sup>6</sup> 国際会議の「組織委員会北海道小委員会」宛てに送った手紙では、「"アイヌ"の現状( primitive でも isolated ethnic group でもない、日本の最下層農民・労働者の一部という現状)や彼らのおかれている社会的状況(差別、貧困)そしてこうした状況におかれた彼等にとって、アイヌと指摘される事が最大の侮辱・苦痛であること、"アイヌ"の現状をよく知り、彼らに同情を寄せる学者にとってすら"アイヌ"に精神的苦痛を与えずには調査出来ない状態なのに、..."アイヌ"を isolated primitive ethnic-racial group としてしか知らない海外の人類学者が大挙して見物に行くことが、どれ程大きな苦痛を与えるか、こうした事柄を組織委員会の方々が真剣に討議したとは考えられません」(p.15)と記していた。

<sup>7</sup> 後に知ったことだが、実際にはほぼ予定通り実施された。

<sup>8</sup> 渡邊欣雄氏、首都大学東京教授。この最終講義の場にいらした。

<sup>9</sup> 佐々木高明氏、国立民族学博物館名誉教授、元国立民族学博物館長。

<sup>10</sup> 祖父江孝男氏、国立民族学博物館名誉教授。

その当時何を考えていたのか。あまり細かく覚えていませんが、とにかく「何のために人類学をするのか？」ということ、を考えていたように思います。人類学をする時には、人類学者と現地の人たちとの関係があるわけです。その中に、例えば、私が知り得た資料では「民博設立の趣旨」の中に、「人類学者は異文化についての専門家であるから、その異文化理解についての専門的な知識に基づいて、それを社会に応用する」といった文言がありました。その当時は日本も経済成長の真只中で、海外に日本人のビジネスマンが活躍していた時代です。そこで異文化理解についてビジネスマンに我々が訓練する機会を与え、といったような、そういう謳い文句が入っていたわけです。そういうような、人類学のさまざまな側面についてよく考えた時期だったと思います。

もちろん、一緒にストライキをした人たちの中には、人類学から離れた、もうそういう犯罪的な人類学には参加しないという選択をした人もいました。私もつきつめればそういう選択もあり得たかとも思うんですが、いろいろ考えてですね、そこまでは踏み切らないでとどまろうと思ったわけです。

この「人類学的調査についてのノート」はそういう意味で、一種の私の「グラウンド・ゼロ」といいますか、出発点だったろうと、今にして思えばそう思えるような位置にあるものです。

### 《家》研究のはじまり

70年の春にスト解体宣言をしてから、大学院の授業になど出る気はしませんでした、空白の期間を過ごしていたわけです。その空白の中でやはり、今後の方向を考える時に、自分には人類学しかないというのが結論でしたので、そこでどういう形でやるのか、というので最初に書いたのがこの論文です<sup>11</sup>。日本の農村のモノグラフとして、調査自体は1967年に先輩の井上兼行さん<sup>12</sup>と一緒に一ヶ月間住み込んでやっていました。一ヶ月というのは調査としては非常に短いのですが、その当時の日本の農村研究としては、異例に長い期間でした。そこで資料を得たうえに、それ以前に、学部時代に、長島さん<sup>13</sup>がリーダーになって学生を連れてここで実習をやっている、その時の資料も大量にあたりまして、それに基づいてこれを書いたわけです。

中身については、今読み返すと非常に硬い文章で書いていまして、本当に《家》について関心のあるような人にしか読んでもらえない文章ですが・・・のっけから中根千枝先生<sup>14</sup>と蒲生正男先生<sup>15</sup>の批判から始めています。その当時、日本の人類学における親族論とい

<sup>11</sup> 「《家》の内的構造と村落共同体 出雲の《家》制度・その1」『民族学研究』35(3), 177-215、1970。

<sup>12</sup> 井上兼行氏、獨協大学教授。

<sup>13</sup> 長島信弘氏、中部大学教授。一橋大学名誉教授。

<sup>14</sup> 中根千枝氏、東京大学名誉教授、日本学士院。

<sup>15</sup> 蒲生正男氏、元明治大学教授。

うと、この二人がお互いに論争して学会をリードしていたわけです。それで私はその二人ともダメだという一刀両断ですね、中根先生は私の先生でもありますし、蒲生先生も都立大学に関係が深くて、要するに学界の権威にたてついたわけです。

そこで言っていることは、《家》とか同族を親族集団としてつかまえるのはおかしいと、まず《家》は《家》としてつかまえて、あるいは同族は同族としてつかまえて、その全体構造の中からどうして親族がつくられるかという形で追究していかないと、親族はわからないだろうということを言っているわけです。これは手前みそですけども、約 10 年後にシュナイダーが人類学における親族研究を批判して言っていることと、まあ似たようなことをここで言ってたなあ（笑）という、そういう考え方ができると思います。

この時に全体構造として何を言ったかということ、《家》は一つの社会的な制度なわけですけども、それを支えているのは《家》単独の問題ではなくて、ムラの問題なんだと。ムラを交換の体系として見ていきますと、それは《家》の間の関係に転換される。この村には隣、隣家（りんか）制度という独特のものがありまして、ムラに対する義務を隣に対する義務という形で組織していたんです。その「隣」というのは何かということ、単に「近い友人」という意味の隣ではなく、自分に対して共同体を代表している隣ではないか、そんな風に解釈して、そういう「隣の制度」の中から共同体というものが支えられるだろうという議論を展開していました。

これは、その当時私も少しずつ読んでいました、レヴィ＝ストロースの『親族の基本構造』の「一般交換」の円環状に組織されている基本構造、そしてその reciprocity の展開を追いかけていった、そういうレヴィ＝ストロースの考え方も参照していました。

### 《家》を時間で捉える

実は出雲の《家》研究は三部作を予定していたんですが、実際には二部作に終わりました。二部作目は少し中身に入りまして、《家》の成員がどのように交代していくかということを書きました<sup>16</sup>。この二部作目は、ほとんど他の人に読んでもらった記憶がなくってですね（笑）参照されたという記憶はまったくないんですが、自分としては意欲的に書いたつもりでした。《家》の成員交代過程というのは、《家》という制度とそれから個人の行動と、両方絡まっていきます。《家》が成員をリクルートする時に、どういう規範を使うのかというのがテーマになるわけですが、《家》というのは、最初のテーマであった、制度的な、ムラの共同体的構成に支えられて永続ということを予定する、そういう組織だったわけです。《家》が永続していくために成員をリクルートしていくわけで、《家》の長期的な存在と個々人の生活とをつなぐ媒介として、《家》の制度というのは、地位構成自体が時間の言葉

<sup>16</sup> 『《家》と親族：家成員交替過程 出雲の《家》制度・その 2』『民族学研究』37(3), 186-213, 1972; 38(1), 50-76, 1973.

で定義されているというのが、まず私が見出した特徴でした。

よく言われることですが、先祖は《家》の過去であり、家長夫婦は《家》の現在ですし、後継ぎは《家》の未来にあたるわけです。《家》の成員を確保していく過程というのは、過去を先祖に送って新しい未来を確保していく、後継ぎを確保していく、という時間の操作になるわけで、《家》の構造が時間の言葉で構成されているというのが最初の捉え方でした。

その《家》の未来を順調に確保するためにまず一群の規範があります。長男から順に男の子を後継ぎにしまして、息子がいない場合は娘に婿をとる、両方いない時には養子をとる、といった規範です。しかし、途中でそのプロセスが頓挫することがしばしば起き、規範が予定していた順調なプロセスがとれない場合があります。そのさまざまな状況に応じてさまざまな対処法が用意されていました。

そういうものを順番に配列していきますと、《家》の対処の仕方の中に、一貫した時間の操作というものがあるということが分かってきました。順調な時間を、一度過去に戻ってもう一度やり直したり、一旦はじめた現在をもう一度現在の対処としてやりはじめてみたり、更に先に進むと、確保したけれども危うくなった未来を先取りして何とか持ちこたえさせる。そんな風にして、《家》が時間的な操作を通して、次の世代を何とか確保しようとする、そういうプロセスを読み取ることができました。

今、人類学の関心では、社会構造とか社会制度と個人との関係というのはなかなかテーマになりにくいので、是非読んでくださいと言えないのが残念ですが、ここまできますと、次は、具体的にこういう状況になったときに人びとがどういう行動をとるかということが問題になってくるわけで、そこで私は規範逸脱がみられたケースすべてについて事例分析をやってみました。そういう風にして、制度から個人の行動にまで至るこの枠組みで、《家》というものを捉えてみたわけです。

### 《家》研究から母系家族論へ

こういう風にして、70年代から80年代にかけて、最初のテーマとして親族を選んで、《家》研究からはじめて、少しずつ枠を広げていきました。その一つに、母系家族の研究があります。これはたまたま、先輩の末成道男さん<sup>17</sup>が台湾のアミ族の調査をされてドクター論文を書かれた。その概要を東大の研究会で話されまして、私は非常に面白いと思って、まだ出版前のものを読ませていただきました。それと、トロブリアンドとインド・ケララのナヤールの3つを比べまして、母系とはどういうものかを考えてみたわけです。

これもほとんど読んでもらっていません(笑)。なんでいちいちそういうことを言うのかと奇妙に思うかもしれません。別に無視されていた(会場笑)というわけではないんですが。まあ、一種私の研究スタイルだと思うんですけども、あんまり他の人たちと言葉を

---

<sup>17</sup> 末成道男氏、聖心女子大学、東京大学、東洋大学の教授を歴任。

あわせたり議論をあわせたりするということをしないで、自分の考えたことだけでやりますので、なかなかわかってもらえない(笑)。あんまりそういうことを言っても仕方がないんですが。

でもこの論文もですね、私が親族をテーマに書きたいいろんな論文の中ではかなり面白い方なのではないかと、今でも思っています。これを書いた時に、マルクスが古代ギリシャの3つの共同体について比較研究している論文があって、非常にすっきりとした比較研究を行っていました。それに似たようなすっきりした分析ができないかなあと試みてみたものです。その当時、人類学ではシュナイダーやオードリー・リチャーズが母系について研究していきまして、レヴィ＝ストロースも言っていますが、母系的なシステムの難しさを「謎」と称していました。要するに、社会生活は男が中心になってやっているのに、母系というのは女性のつながりで社会的な継承をしようとする。その間にはどうしても解消できない矛盾がある、といったような議論です。端的に言えば、男は母系的に言うと自分の姉妹や母に義務を負うわけで、妻には義務を負いません。しかし、子ども、妻の子どもを生むためには一緒に暮らさないといけない。そうすると、男はですね、自分の妻と姉妹とに自分のアリージャンス(allegiance)を分けないといけない。その分け方をコントロールするのがなかなか難しいわけです。

それについて私は、3つの比較研究から、母系には一貫したシステムがあるんだ、ということに解答したつもりでした。それを「母系家族の思想」という風にして名づけたのですが、これもですね、今から30年も前の論文ですが、興味のある方は是非読んで頂きたいと思いますけれども、「母系家族の思想」とは何かというと、男がですね、自分の成果、労働の成果であれ、子どもを生むという成果であれ、あるいは子どもを育てるという労働ですね、(そういった)自分がその労働で育てたもの、作物や子どもを、自分では取得しない。母系ってというのは、他者に譲るシステムだった。トロブリアンドでもそうですし、他の社会でもそうです。

男は一生懸命、自分の子ども、妻に産ませた子どもを育てるんですけども、成人するとそれは母方のオジの方へ行ってしまうと、自分の後継ぎにはならない(その代わりに、自分のところには、他の男が育てた子どもが跡継ぎに来ます)。これはある意味で、人間社会の共同性の作り方として、非常に理想的な一つの極点を実現しているんじゃないか、というのが私の読み方です(笑)。「母系家族の思想」というのが人類社会の中にあったというのが、私の解釈です。

### シュナイダーとの論争、対話

《家》制度から始めて、母系家族の構造もそうですが、非常に構造的な議論をしていました。その構造的な議論をずっと推し進めて、1991年に *Man* 誌に “On the Notion of

Kinship<sup>18</sup>というタイトルで論文を書きました。この時代には、もうすっかり人類学ではキンシップというのは時代遅れのテーマでして、既にシュナイダーが親族研究というのはあり得ないということを書いてから 10 年近くたった時代ですから、この時代に親族を議論するなんていうことは、特にイギリスでは、ほとんど考えられなかった状況です。でもまあ、シュナイダー批判という形でこれをやりまして、それをその当時 1989 年に London School of Economics (LSE) に在外研究でいましたので、発表する機会を与えられ発表したんですけれども、LSE ではやはり時代遅れのものだという受け止め方だったと思います。それを *Man* に投稿したら、編集長が、日本から投稿があって、しかもその中に日本の人類学的な議論についてかなり論じていた、日本にもそういう議論があるというので興味をもってくれたようで、それを載せてくれたわけです。

その査読の過程で非常に厳しいコメントがありました。「厳しい方をお前に送る」と言って、編集者が私に送ってきたんです。論文では具体的なヤップの事例を扱っていたんですけれども、そのコメントにも非常に詳しいヤップについての解説が書いてありまして、一体こんなにヤップに詳しいコメントータは誰だろう？と思いつつ、私は回答を加えて論文を修正し、編集者に送ったんですね。それで、編集者はそれでいいと判断して、つまり査読者はだめだと言ったんですけれども、編集者は掲載すると決定してくれて、論文に載りました。そして、論文に載ってしばらくして編集者から私に手紙が来まして、「お前にコメントが来た」と。そのコメントを見ると、その著者はシュナイダーだったわけです。書いてあることは、査読のコメントと全くそっくりで(笑)(会場笑) 要するに、シュナイダーに査読をさせたわけですね。

これには私、非常に驚きました。ヤップについての一番の権威はシュナイダーなわけで、日本人の投稿者であっても、一番適切な、というか、シュナイダーという大家にコメントさせていたわけですね。この扱いは私には非常にありがたいと思いました。シュナイダーのコメントに対して私も回答をして、それが 1992 年の “Ethnocentrism and the notion of kinship<sup>19</sup>” という、シュナイダーと私の二人の、コメントとリプライという形で載ったものです。この当時シュナイダーは非常に高齢でしたので、これが、彼にとって活字になった最後のチャンスだったと思います。

後日談ですが、このコメント欄の論争が載った後に、編集者から手紙が来まして、実は最初の査読のコメントもシュナイダーが書いたということ、私に知らせてくれました。ただし、査読者が誰かということは、アノニマス・レビューですので、知らせないことになっている。それでもお前には知らせる(笑) で、もしシュナイダーと連絡をとりたかったら、連絡を取ってもよいけれども、編集者からそう教えられたということは書いちゃい

<sup>18</sup> On the notion of kinship. *Man* (N. S.) 26(3), 377-403, 1991.

<sup>19</sup> Ethnocentrism and the notion of kinship. *Man* (N. S.) 27(3), 631-633, 1992.

けない(笑)と、そういう手紙をもらったんですね。それで、私はシュナイダーに手紙を書きまして。あなたは私の査読者だったに違いないという文体にして。なぜあなたとわかったかという理由の一つに、私が今まで出くわしたことのない単語をあなたは使っていたと(笑) 査読のコメントにも使っているし活字になったところにも使っている、だからあなたに違いない、というような理屈をつけて(笑) 直接送ったんですよ。シュナイダーはといえば、レフェリーの時のコメントのファイルはどっかにやっちゃったからお前の言うことが正しいかどうかは確認できない、というようなことを返事で書いてきましたけれども、それでも、私の手紙を非常に喜んでくれたようで、今度二人で *Man* に論争をもう一回やるような論文を書こう、みたいなことを言いまして、アメリカに来る機会があったら是非、家に来いと言ってくれたのですが、そのうちに彼は亡くなってしまいました。

### 1980年代、もう一つの親族研究：身体が関わる行為に根ざす家族論へ

1970年代から80年代まで《家》研究から始めて、(*Man*の論文という)一つの成果になったんですが、しかしこれは90年代になってみるとさすがに、非常に時代遅れでした。この間、親族の制度的あるいはイデオロギー的な側面ばかり追いかけていてもダメといただきますか、例えば授業で親族の話をして学生にはもう一つピンとこないところがありました。そこで、家族というものは何かということを学生に納得してもらうのにどういう説明をしたらよいかということをしばらく考えていて、それで到達したのが、一つが「家族と身体の慣習」<sup>20</sup>です。ここで私が考えたのは、家族とは何かということを行動面から追いかけてみたわけです。家族の特徴というのは、子どもを生んだり、性行為をしたり、あるいは病人を看護したり、食事をしたり、身体に直接関わる行為であるわけです。これを追いかけてみますと、明らかに、社会のどこでも同じような行動をしているわけじゃないわけです。例えばヌアーですと、自分が食事をしているところを他の人に見られるのは非常に恥ずかしい、という社会もあるわけですね。そのようにして、身体が関わる行動というのは、多かれ少なかれ社会から隠蔽されて排除されます。そこに私は着目しまして、身体には価値観が付与されていて、それは概ね、穢れとか猥褻とか恥だとかいう形で社会から排除されていると。そうすると、家族というのは社会から排除された身体を受け入れる受け皿ではないか、そういう結論を出したわけです。

これと並行してもう一つ書いたのが、田辺さん<sup>21</sup>が編集した論文集に書いた論文でした<sup>22</sup>。みなさんはこの論文集では、最初の民族論メモランダム、内堀さん<sup>23</sup>の「民族論メモラン

<sup>20</sup> 「家族と身体の慣習」『家族史研究』7, 26-56, 1983.

<sup>21</sup> 田辺繁治氏、大谷大学教授、国立民族学博物館名誉教授。

<sup>22</sup> 「『血』の神秘 親子のきずなを考える」田辺繁治編『人類学的認識の冒険 イデオロギーとプラクティス』pp. 45-68, 東京: 同文館, 1989.

<sup>23</sup> 内堀基光氏、放送大学教授。元一橋大学教授。

ダム」というのをよく読まれると思うんですが、その二番目に私の論文があるんですけども、これはほとんどどなたも(笑)(会場笑)読んでくれないといえますか……。ここでは『血』の神秘」ということで、身体的な関係のシンボリズムを追究してみました。なんで家族には愛情が伴うのか。通常それは親子という生まれの関係だからだというような説明をしていくわけですが、生まれの関係から何で愛情が生まれるのかということは、なかなか解答が出ないものです。いろいろな議論をした後で、結論は、家族独特のこの愛情という関係を表現するのに身体的な関係を言うのが一番適しているからだろう、という解釈を私はしてみました。フレーザーの言う類感呪術の中に、感染呪術と模倣呪術というのが分けられていますが、その内の感染呪術のつながり、もともと結びついていたのが離れた後でも関係があるというつながりと、母親から生まれた子どもは生まれた後でも関係があるという概念は同じではないか、そういう論理を使ってみました。

### 親族研究の行き詰まり

先ほど、ほとんど読んでもらえなかったと(笑)言ったんですけども、亡くなられた浜本まり子さん<sup>24</sup>、浜本さん<sup>25</sup>の奥さんですが、彼女が取り上げてくれまして、小田亮さん<sup>26</sup>も取り上げてくれて、嬉しかった記憶があります(笑)。なんて言うか、売れない作家みたいなもので、ちょっとでも(笑)利用されると非常に嬉しいという、そういう感じですね。

いずれにしても、制度的な追究というのは90年代になるととても古くなっていますし、それと並行してやっていた親族研究はですね、母系家族にしても、身体の慣習とか血の神秘の議論でも、あまり他の人たちの議論と噛み合わないでいる間に、人類学からほとんど親族研究が消えるというような状況になってしまいました。確かに80年代、構造主義的なシンボリズムがずっと70年代から続いて議論されていきましたので、結構翻訳なんかも出ていまして、学生に教えるには材料があったのですが、しかし、そういうことをずっとやっても繰り返しばかりのようで、なかなか発展性がない。そして80年代の終わり頃になると、もうこのままではやっていけそうにないという、非常に行き詰まり感を感じていました。それで何とかしないといけなかったのですが、80年代の最後にLSEで研究する機会を得まして、で、イギリスに行ってみますと、親族研究はまあダメでしたけれども、まだ儀礼なんかの研究では古典的な研究が行われていましたので、私も少し古いテーマだったけれどもdepartment seminarで先ほどのキンシップについて話をさせてもらったりしたわけです。

でもまあ、行き詰まり感は同じですので、日本に帰ってきたら人類学の方向を考え直さ

<sup>24</sup> 浜本まり子氏、元九州共立大学教授。

<sup>25</sup> 浜本満氏、九州大学教授。元一橋大学教授。

<sup>26</sup> 小田亮氏、成城大学教授。

なきやいけないなと思ってはいました。

### 民博での仕事(1): 周辺民族研究、人類学史の追究

90年のはじめに帰ってきましたが、1年で民博に移ることになりました。そこでは授業で新しいことをしなくてもよくなったわけです。しかし、民博には共同研究の予算がありますので、その研究会を組織するという形で新しい試みができるだろうと思いました。最初は「世界の周辺諸民族の現在」というタイトルで、つづいて「世界の文化的状況と人類学」というタイトルでいろいろな人に参加してもらい、研究会を開きました。これは私自身にとっても非常に勉強になったと同時に、共通の関心をもつ人たちが論文を書く態勢にありましたので、その成果は2冊の論文集になって実現しました。

一つは、岩波の『文化人類学講座』の中の一冊で、『思想化される周辺世界』という巻です<sup>27</sup>。もう一つは、世界思想社から出していただいた『周辺民族の現在』という論文集です<sup>28</sup>。今から見れば、人類学者が研究する社会の現在を現在として扱うのは当たり前で、当時も既に当たり前になっていたわけですが、私の中ではすぐに当たり前とは受け取れなくて、何らかの研究姿勢を変えていかないと取り組めないものでした。そういう意味で、この研究会は自分にとって非常に勉強になりました。そういう、現代にアプローチする方法を探っていくと同時に、先ほど言いましたように、なぜ現代にアプローチができないのかということを考える必要がある。それで現代にアプローチする人類学のはじまりとありますが、あるいはそれ以前の、現代をアプローチしなかった時代の人類学というものを、一種反面教師として見る必要を感じまして、こちらの方は私の個人的な研究として、人類学史も並行してやっていったわけです。

90年代は、そういう意味で、周辺民族研究と人類学史という二つのテーマで追究していきました。現代研究の方では、私の理論というのは、あるいは強い考え方といったものは特にあったというわけではありません。この研究会を通して学んだ姿勢を、個別の事例にいくつか応用してみたというのが実情です。

一つは、論文としてなったのは、97年に英語で書いたものです<sup>29</sup>。Niessen というカナダの研究者が民博にしばらくいた間の観察を、帰国後にアイヌ展示を批判するという形で書いた論文<sup>30</sup>がありました。これは民博の展示が海外から批評された稀なケースでもあっ

---

<sup>27</sup> 青木保ほか編『思想化される周辺世界』(岩波講座文化人類学 12), 東京: 岩波書店、1996. 序論「植民地的状況と人類学」(pp. 1-29)を執筆.

<sup>28</sup> 清水編『周辺民族の現在』京都: 世界思想社、1998. 「序章 周辺民族と世界の構造」(pp. 15-63)を執筆.

<sup>29</sup> Cooperation, not domination: A rejoinder to Niessen on the Ainu exhibition at Minpaku. *Museum anthropology* 20(3), 120-131, 1997.

<sup>30</sup> Sandra A. Niessen, "The Ainu of Mimpaku: a representation of Japan's indigenous people at the National Museum of Ethnology, *Museum anthropology* 18(3), 18-25, 1994.

たし、しかもほめられたのではなく批判されたケースであったので、民博の中でかなり議論になっていた論文です。一番の担当者は大塚和義さん<sup>31</sup>で、大塚さんが用意していた反論と私のものが一緒に *Museum anthropology* という雑誌に掲載されました。この論文を載せるには論文だけの力では足りなかったようで、民博が直接この編集部と是非載せるようにと交渉したように聞いています。

ここで議論していることは、Niessen が言うには、民博のアイヌ展示というのは伝統を invent している、捏造しているという議論です。展示の説明文には、アイヌが植民地支配のもとに差別され、文化的な持続が難しかったと書いてあるわけですが、そういう植民地支配とか、アイヌの人たちが差別されている生活の状況とか、そういう歴史の中の具体的な姿は一切展示にはありませんでした。モノとしての展示は、非常に古い昔の用具であったり、まだ和人が入ってくる以前の狩猟生活をしていた時代の住居の模型があったりするわけで、展示のモノを追って見ていくと、まるで今でもアイヌの人たちが昔ながらの採集狩猟生活を送っているような、そういうイメージを与える性質のものです。

Niessen の批判自体は、そういう意味で間違っていないのですが、彼女は民博のそういう展示の仕方と、それから萱野さん<sup>32</sup>、アイヌの知識人ですが、萱野さんがそれまで私設でつくっていた博物展示施設、これも観察しまして、両方よく似ていると書いています。彼女に言わせてみれば、萱野さんはアイヌの権威であるけれども、民博という支配者側の権威と一種共犯関係に立っていて、そしてアイヌ文化を表象している、というようなことを implicit にでしたけれども書いていた。私が批判したのは、そういう展示には理由があるんだということで、展示が制作された経緯と、展示の背景を、文献も引用しながら書いたのですが、Niessen は文献的な調査を一切しておらず、彼女自身の観察とインタビュー記録だけで書いていた。そういう姿勢というのは、要するに言ってみれば、相手は無文字の社会を扱ってきた人類学的手法でもって民博を見ているわけで、おかしいじゃないか(笑)というのが一つでした。

もう一つは、萱野さんが自分の文化を展示するのに、サルベージ人類学的な形で、昔の姿をずっと描いているというのは、当事者の、文化復興したい当事者の、復興する文化の目標をそこで示しているわけで、そうすると、当事者の文化表象にとってサルベージ人類学的手法というのは全く無意味なのではなくて、むしろ意義があるコンテキストだってちゃんとあるんじゃないか、そういうコンテキストを Niessen が見ていないんじゃないかと指摘しました。実際、私はずっとサルベージ人類学はおかしいと言ってきたわけですが、後で触れますように、非常に皮肉なこととして、一方で人類学者がサルベージ人類学で昔の姿を再現していた、その再現した姿を、当事者たちが自分たちの文化復興の一つの

---

<sup>31</sup> 大塚和義氏、国立民族学博物館名誉教授。Kazuyoshi Ohtsuka, Exhibiting Ainu culture at Minpaku: a reply to Sandra A. Niessen. *Museum anthropology*, 20(3), 108-119, 1996.

<sup>32</sup> 萱野茂氏、二風谷アイヌ資料館長。

材料として使っている、文化復興の道具としてサルベージ人類学も有効である場面もあるということは、別の論文で書いておりましたので、そういうことがここでも生きたように思います。

### 民博での仕事(2): ハワイの主権運動の現在を展示する

こういう周辺民族のもう一つの研究成果は、活字にはまだほとんどなっていないのですが、私なりの成果はハワイの展示でした<sup>33</sup>。何の変哲もない、ハワイによくある観光のお土産屋みたいな外見のお店を再現したものです。民博のオセアニア展示をリニューアルすることになりまして、展示プロジェクトチームではオセアニアの先住民を取り上げることにしました。先住民運動が顕著だったのは、オーストラリアとニュージーランドとハワイでしたので、この3つの地域で先住民の文化を取り上げようということになったのです。私はこの全体の企画とハワイの部門を担当していました。ハワイについて、今の先住民の文化をどういう形で取り上げるかというのはなかなか難しいと思ひまして、手探りだったのですが、ハワイを巡りながら材料を探しているうちに、たまたまこの店に行きました。この店に入った時に、ほとんどこれはハワイ人が自己自身を表象している博物館に見えたんですね。ここにはハワイ人が大事だと考える様々な品物と同時に、先住民運動の、主権運動のメッセージが書いてあるTシャツとか、パンフレットとか、それから主権運動の主張を述べている本なんかと一緒に並べられていました。これは博物館ではないお店なんですけれども、ハワイの人たちがお店という媒体を借りて自分自身を表現した博物館のように見えたわけです。民博の展示場にも十分おけるくらいの小規模のものでしたから、私は、これを是非再現する形でハワイの先住民のあり方を見てみたいと思ひて、それでハワイ展示をつくったわけです。

この店は運営母体が主権運動の中でも一番大きい組織で、非常にラディカルに主張している組織でした。当然その解説文を書こうとすると、ハワイの主権運動の主張を述べることとなります。この当時既に、既にというか日本ではむしろ遅いんでしょうけれども、博物館展示というのは、まあ人類学の表象と同じですが、他者を歪めて、あるいは貶めて描く権力的な表象である、という批判は一貫してありましたので、私はそれを意識して、本人たちの自己表象をここで展示するという形で、そういう批判を回避するといひますか、批判に回答できるのではないかと考えて、この展示を選んだわけです。

### 民博での仕事(3): 対話と論争、そして展示へ

民博ではその当時、そういう原則<sup>34</sup>は展示委員会のような現場では原則になっており、

<sup>33</sup> 「ハレ・クーアイ生協」展示(国立民族学博物館常設展示「オセアニア」のテーマ展示「オセアニア先住民の文化運動」の一部) 2001。

<sup>34</sup> 「当事者による表象を当事者と協力して展示する」という原則(当日配布されたレジюме、

ちゃんとした民博の方針になっていたんですけれども、実際にそれを実行してみますと、例えば一つ一つの解説文を書く時に、こちらが一方的に書くのではなく、相手に送ってその承認を得て、承認を得たものを展示用を書く。また、展示場のデザインにしても、できあがったところで先方に送って同意を得て、それでこちらで実現する。そういうふうにして、一つ一つのプロセスに相手の同意を得るということ为先方からの条件としてつけられましたので、それに同意したわけです。そういうやり方をずっと上で見てみると、まるで相手の言いなりになっているように思えたようでして、ちょっとしたトラブルになりました。

これにはまあ、私がこの一橋に移ってくる時期とちょうど重なっていたということもあるんですけれども、私が一年目に全体の計画をつくって、具体的な計画もつくってですね、二年目にはそれを制作するという、そういう手順でやっていたんですけれども、一年目の終わりに私が一橋に転出することになって。ちょうど(3月の)今頃ですね、転出で忙しい頃に、急に上から、先住民の言いなりになるようなやり方はおかしいので、この計画は一旦中止してもう一回練り直せ、といったような方針が下りてきたわけです。それで私も怒りまして(笑)、本当にまあ、数日間徹夜して批判文章を書いてですね、インパクトのある形で出さないと、「どうせ清水は出て行ってしまいうんだから」と(笑)、もうちょっと先送りされれば発言権がなくなってしまうので、向こうに時間を与えると私の負けになってしまうので、権利があるうちに文章をつくりまして、館員に配ったんですね。展示の計画ではいろんな原則を立てたわけですが、例えば相手の合意を得るとか、あるいは展示場に3つの言語、ハワイ語と日本語と英語で解説をつけるとかですね、そういう新しい原則を採用するたびに展示委員会の合意をとっていたんですけれども、そういうことも先走りに思われたようで、つまり、民博の組織的な問題もいろいろあったわけです。それで私はその文章の中で、「民博というのは形は鯛だけれども、脳みそは腐っている」と(笑)こういう言い方までしまして、みんなに配った。確かに、非常に過激なことをすると思われたと思うのですが、でも結構、お前の言うとおりでという人もいましたね。もちろん、全面的に賛成するわけじゃなくて、こういうやり方はよくないとか、まあいろいろと(笑)コメントもつくんですが、結構賛成してくれる人もいました。

結論は、上から下りてきた方針は撤回して、我々の展示チームの方針通りにやってよいということになりました。もう本当にぎりぎりだったんですが、そういう議論をしまして、ですから、私が一橋に移ったのは別に民博とケンカしたからではないんですけれども、移ることが決まったあとでケンカになって(笑)別れ際に大喧嘩した、そういう感じです。ただまあ、民博は非常に度量が大きいというか、なんていうか、又工的というか矛盾が多いというか、私にちゃんと名誉教授をくれまして、ですから私は一橋教授でしたけれど

も、国立民族学博物館名誉教授でもあったわけです。

それから歓送の時もですね、みなさん非常に和やかに(笑) 決して、出るからせいせいしたって言うんではないと思うんですね(笑) それなりに楽しい歓送会をしてくれまして、挨拶の時に「私は民博を愛するから愛憎半ばして苦言を呈するんだ」というような発言をして出てきました。

それで民博との関係が終わったのではなくて、あと一年、一橋に移ってからですけども、今度は実際に展示を実現するプロセスがありまして、最後は、ちょうど今頃ですけども、たしか(3月)16日か17日がオープニングだったと思いますが、2月末から3月前半にかけて現場で制作するのに付き合わないといけませんので、一橋の仕事を終えて向こうへ駆けつけて現場で夜遅くまで仕事をして、それからこっちへ取って返すみたいなの、非常に忙しい期間を過ごしたのを覚えています。この展示の評価についてはいろいろだと思いますが、一見してこれは普通のお土産屋さんみたいなものですから、何でこんなものを民博に置くのかという話になるとと思いますが、よく見てもらうとその中にいっぱい先住民運動の主張が入ってしまっていて、ハワイ先住民が見たハワイ文化の表象になっている。私はそう理解しているのですが、そういうものになっているだろうと思います。

### 人類学史研究のきっかけ：ヤン・ファン・ブレーメンさんとの出会い

もう一つのテーマは、人類学史の研究です。アメリカで1980年代に、*Writing Culture*などで始まったポスト・モダンな人類学、私はそれを「人類学の人類学」と思っていますけれども、この波の中で、G. ストッキングの人類学の歴史が私にはわかりやすく、人類学史をみることで人類学のさまざまな特徴というものを追いかけてみようと思ったわけです。

最初は、欧米における人類学の歴史を追いかけていたのですが、そのうちに、私はずっとミクロネシアの調査をしていましたので、そのミクロネシアに関係したオセアニア研究、日本のオセアニア研究にも視野を広げ、更に日本の人類学史、それから戦時における日本の人類学というものに焦点を移してきました。

このプロセスでは、オランダのライデン大学の先生だったヤン・ファン・ブレーメンさんが、私の非常に大きなガイド役でして、多分彼と出会わなければ、こういう仕事、特に日本の人類学史に関する研究はなかつただろうと思います。彼は、不治の病といいますが、特殊な癌にかかってしまって、オランダは尊厳死、安楽死ができますので、さっさと仕事の後始末をつけてですね、それから日本にも友人に会いに来て、私も会いましたが、そうしてオランダに戻ったら本当に驚くほど早く安楽死、尊厳死してしまいました。非常に、私としての印象では潔い生き方をしたと思います。

その彼のガイドで、例えばこれ<sup>35</sup>はその一つですけれども、これは彼が組織したシンポジウムの記録でして、その中に私も加えてもらって、ここ（表紙）に私の名前が（共編者の一人として）載っていますけれども、私はイントロダクションを一緒に書いてだけで、編集自体はヤンがやったものです。非常になんていうか、彼の好意を感じずるものです。これが、私が本格的に、本腰を入れて人類学史を勉強してみようと思ったきっかけです。

### 人類学史のいくつかの論文

私の頭では、まずヨーロッパの人類学から始めて、日本の人類学に進んで来たわけですが、論文自体は両方並行で出版されまして、最初が 1993 年の「永遠の未開文化と周辺民族」という、民博の『研究報告』に載った論文です<sup>36</sup>。これは、今から見ると非常に拙いものでした。その当時、既に太田好信さん<sup>37</sup>がシリーズの形でアメリカのポスト・モダン人類学をずっとレビューする、非常に精力的な仕事をされていました。それに比べますと私は全くの不勉強なわけですが、そういう意味で、もう太田さんの真似をしてもとてもかなわないので、そういうことはしないで自分なりに考えようと思って書いたものです。非常に古くさい考え方が混じっている論文ですけれども、でもまあ、多分「永遠の未開文化」というのはなかなかタイトルが（笑）よかったと思うんですが、何人かの方が引用してくれまして。これはそういう意味で、私としては、むしろ中身よりもタイトルで読んでもらえたという、ちょっと忸怩たるものがある論文です。

その後、その続編といえますか改訂版を用意していきまして、その中のマリノフスキーの部分を文章にしたのが、1999 年の、やはり民博の『研究報告』に書いた「忘却のかなたのマリノフスキー」という論文です<sup>38</sup>。これもやはり他にモデルがなくて、私が自分なりにマリノフスキーの 1930 年代の文化接触研究を読んだんですけれども、アダム・クーパーの人類学史を読んでみてもですね、この時期のマリノフスキーというのはあまり評判がよくないというか、ほとんど評価されていないのですが、私からみると非常に面白いものがありまして。そういう意味で、これもちょっと気取ったタイトルにしました。忘れておくにはもったいないということで「忘却のかなたのマリノフスキー」、英語の方はもっと過激で、“Malinowski rising out of oblivion”、まあそういうタイトルにしました。

これは、栗本さん<sup>39</sup>が論文の中で「清水の読み方はおかしい」と。田中雅一さん<sup>40</sup>にも、

---

<sup>35</sup> Jan van Bremen and Akitoshi Shimizu, eds., *Anthropology and colonialism in Asia and Oceania*. Surrey, London: Curzon Press, 1999. 所収論文は注 42。

<sup>36</sup> 「永遠の未開文化と周辺民族——近代西欧人類学史点描」『国立民族学博物館研究報告』17(3), 417-488, 1993.

<sup>37</sup> 太田好信氏、九州大学教授。

<sup>38</sup> 「忘却のかなたのマリノフスキー——1930 年代における文化接触研究」『国立民族学博物館研究報告』23(3), 543-634, 1999.

<sup>39</sup> 栗本英世氏、大阪大学教授。「植民地行政、エヴァンズ = プリチャード、ヌエル人」山路勝彦・田中雅一編『植民地主義と人類学』pp. 45-69, 西宮：関西学院大学出版会, 2002.

かなり詳しく、確かに”rising out of oblivion”、今思い出すべきものはマリノフスキーだけけれども、マリノフスキーだけじゃなくて、ブラックマンのマンチェスター学派ももっと評価すべきだ、だから清水は強調しすぎである、そういうコメントをもらっています。それから山路さん<sup>41</sup>が非常に詳細に、私がこの中で引用していなかった文献も引用して、要するに清水の文献探求は不十分であるとさとするような文章を書かれています。

そういう意味で、私を書いたものの中では珍しく反応があったといいますか、手応えを感じた（笑）ものです。まあ、こういう時の常ですけれども、だからといって考え方が間違っていたわけではないという、批判を受けた時の常套文句で、私は今でも別に栗本さんや田中さんのコメントがあっても、私の考え方は特に間違っているとは思っていないんですが、いずれにしても、西欧の人類学についてはこういう形で一つ形にすることができました。

もう一つ、日本の方については、この論文集の中に日本の人類学史を書きました<sup>42</sup>。非常にこれも漏れが多くて、例えば台湾の部分について、末成さんから訂正すべき点を細かく指摘していただいたりしました<sup>43</sup>。非常に粗っぽくてよくないんですけれども、でもまあ、日本の人類学の歴史を人類学の歴史として描いているものは、この時点では他になかったと思ひまして、そういう意味で、単なる学説史ではなくて、あるいはいろんな個別分野の研究を順番にサーベイするんじゃないかと、人類学の歴史を歴史として扱った本はあまりないと思うので、私としてはうまく書けた論文ではないかと思っています。

### 戦時人類学の研究へ

この論文集(の元になったシンポジウム)は、先ほど言いましたように、ヤン・ファン・ブレイメンさんがライデンで組織したものです。彼はこれに引き続いて、日本を中心にした、日本と欧米を結ぶ視野で、戦時人類学のシンポジウムを計画していたんですが、オランダで当てにしていたお金が出なくてですね、中断していたものがありました。彼が諦めたというようなことを書いてきたものですから、私が努力する番だと思ひまして、民博の研究のチャンスを使ってシンポジウムを開きました。1999年の暮れに開いたんですけれども、その時の論文をまとめて出版したのがこれです<sup>44</sup>。出版年は2003年になっていますが、

---

<sup>40</sup> 田中雅一氏、京都大学教授。「英国における実用人類学の系譜　ローズ・リヴィングストン研究所をめぐって」『人文学報』84, 83-109, 2001.

<sup>41</sup> 山地勝彦氏、関西学院大学教授。「人類学と植民地主義　研究史を鳥瞰する」山路勝彦・田中雅一編『植民地主義と人類学』pp. 3-42, 西宮：関西学院大学出版会, 2002.

<sup>42</sup> Colonialism and the development of modern anthropology in Japan, pp.115-171. 注 35の論文集に所収。

<sup>43</sup> 末成道男「清水昭俊氏の『日本における植民地主義と近代人類学の発展』についての短評」『台湾原住民研究』4, 193-201.

<sup>44</sup> Akitoshi Shimizu and Jan van Bremen, eds., *Wartime Japanese anthropology in Asia and the Pacific*. Osaka: National Museum of Ethnology, 2003.

実際にできたのは 2004 年の 3 月です。シンポジウムの時には、参加者にみんな論文を書いてもらっていたんですが、私とヤンは特に論文を用意しませんで、イントロダクションだけを話したんですけれども、論文集にする時にはそれでは足りないので、戦時人類学について私が考えていたことをこの中で書きました。ヤンも日本とアメリカにおける戦時人類学についてサーベイしていましたので、彼にも是非書いて欲しいということで、ブレーメンと私が、一方は日本とアメリカの戦時人類学、他方は日本に焦点を絞った戦時人類学という形で、全体の総論に当たるような論文を書いています。二人でだいたい 100 ページ、三分の一くらい占めていますので、かなり大きなものです。これは、今後更に拡充して、日本語でやっていきたいと考えているものです。

### これまで、現在、これからのつながり

こういう風にして、年代順に、最初は親族研究を始めて 1990 年代になってから周辺民社会の現代と、それから人類学史と、そういう形で議論を展開してきたわけですが、もう一つ並行してですね、1975 年から始めまして、ずうっと私はミクロネシアのポーンペイの現地調査を行ってきました。結構科研費もいただいてですね、勘定してみますとごく短い訪問も含めて 14 回くらいになっているんです。そういう何度も行っている割には、ほとんど大きなものは書いていない。論文の数は、そうですね、30 年研究しているにしては、やはり少ないと言うべきだと思うんですが、8 ページ目に、ポーンペイとミクロネシアに関するのを書きましたけれども<sup>45</sup>、これもいずれもとても足りないものです。これも、なんて言うか、何で書かなかったのかというのは、いろいろ自分なりに考えると理屈はあるいは理由はあるんですけども、やはり怠慢だったからだというしかないんですが、是非これをですね、今後に生かしていきたいと思っています。

だいぶ時間をとってしまいましたので「これから」に話を移しますけれども、自分の書いた印刷物のリストを見ていただきますと、今年はヤン・ファン・ブレーメンさんの追悼文を書いただけで、とうとう活字になるものはありませんでした。私の単著で書いた単行本というのは 1987 年の『家・身体・社会』というのしかないんですが、これは《家》に関するものをまとめて、それから三章くらい書き加えたもの、これしかなくて、あとは論文ばかりです。

まあ論文ばかり書いていたんですが、私は何度か転職していますので、そのたびに履歴書を書くわけで、その履歴書を書く時にですね、何も論文がない年があるというのはちょっと恥ずかしいと思ひまして、毎年必ず一編は何か論文になるように心がけていたのですが、それでも何箇所か論文がない年があります。それは、考えてみると在外研究に行っ

---

<sup>45</sup> 当日配布されたレジュメの当該ページには 1975 年～2004 年まで計 17 本の論文の題目が連なっている。

ていたり、長期に調査に行っていたりしたその前後でして、あるいは、なかった年の翌年にはいっぱい書いていたりしまして、そういうことからすると、ほぼ毎年必ず論文を書いていたんですけども、去年だけはそういう意味で全くありませんで、とうとう私も書くのが途切れたか(笑)という、そういう感覚なんですけれども。幸いなことにですね、去年と、まあ一昨年も含めてですが、何度か研究会で話しをするチャンスももらいました。いずれもレジュメを作りましたので、そのレジュメの最初のページを再録<sup>46</sup>したんですが、こんなテーマでですね、これから研究を進めていこうかと思っております。

いずれも、新しく始めるというのはありませんで、多分、私の研究スタイルからすると、もっとこれまでにすべきことを先延ばしにしているわけで、これ以上先延ばしするわけにもいかないし、また、新しいテーマに取り組むとなると今までやるべき事を先延ばしにすることになってしまいますので、新しいことはやめにしてくださいね、今まで手がけていて、まだちゃんと締めくくりをつけていないものに取り組もうと思っているわけです。そのうちのいくつかは、ここに再録しているものです。

### 歴史の中の人類学：戦時人類学を掘り下げる、モーガンを読む

「戦時の科学動員と社会学者：平野義太郎の『民族＝政治学』と岡正雄<sup>47</sup>の『民族研究』」、「戦時期の中国農村社会研究：『支那農村慣行調査』を中心に」の二つは、戦時人類学の延長です。共通項は、平野義太郎という戦時の転向学者です。非常に有名なマルキストだった人ですが、治安維持法で挙げられて転向して、戦時中は大東亜共栄圏のイデオログとして学者を動員して、非常にたくさんの研究成果を出版物に出している、そういう人です。平野義太郎について書いている出版物は大してないんですが、さして影響力のあった人ではありませんので、そういう意味で転向学者としてあまり面白くない学者なんです。ごく少数の平野について書いている評論も、なぜ彼は転向したのか、転向する前と後でどういう思想的つながりと断絶があるのか、そういう転向を軸にして書くことが多い。ですが私は、転向という観点から追いかけるのはやめにしまして、転向したあと彼が何をやったのか、これに焦点を当ててみたわけです。

転向の観点からすると、転向後、つまり大東亜共栄圏のイデオログとして言っていることはみんなつまらないことばかりで、時代に迎合しているものですから思想的な言葉はない性格のもので。だから、思想史としてはつまらないので、平野義太郎について書く人は戦時中何をしたかということについてはほんのちょっと、いかに墮落したかということだけを確認して終わっているわけです。が、私がそこに焦点を当てて追いかけてみると、これは非常に有能な、学者を動員した研究の組織者だったことがわかります。それと双壁

<sup>46</sup> 当日配布されたレジュメに再録されている。

<sup>47</sup> 岡正雄氏、民族研究所総務部長(1943-48)、日本民族学協会理事長(1950-58)、都立大学教授、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所長を歴任(1964-72)。

を成すのが岡正雄でして、岡正雄も学者を動員して「民族研究所」というものをつくりました。

その二人を並べて追いかけてみると、日本の戦時人類学の側面が非常によくわかる。これは一昨年（2005年）の春の学会（日本文化人類学会研究大会）で発表したものを拡大して、地球セミナー<sup>48</sup>で、足羽さん<sup>49</sup>に時間をつくっていただいて話をする機会がありました。その後、民博でも話をする機会がありまして、これは原稿もかなりできていますので、是非そのうちに仕上げてみたいと思っています。

もう一方は、やはり平野義太郎と関係してくるのですが、日本の法社会学者が、戦時中に、日中戦争のさなかに「支那農村慣行調査」というのを行いました。これは戦後『中国農村慣行調査』という名前で岩波から出版されまして、朝日文化賞をもらっているんですが、その時の謳い文句がですね、「戦時中にもかかわらず行われた学問的な研究」というものでした。私はそれについて疑問をもちまして、追いかけていきますと、確かに岩波版は非常に学術的な性質の強いものです。実際これをデータにして、何人もの学者がその当時の中国の農村社会について書いている。しかし、これを編集する時にですね、非常に巧みな編集をしまして、戦時中に書いてあった報告書は一切載せていない（笑）。それで戦時中のその資料だけを載せているんですね。その資料というのは、実は法社会学者が自分で集めた資料じゃなくて、満鉄の調査部が集めた資料でした。岩波版というのは、形の上だけでみますと、満鉄の調査員が集めた資料にですね、東大の法社会学者がイントロダクションを書いてつくった本なわけです。その全体の指導者は、末弘巖太郎という法社会学者、偉大な法社会学者で、彼の指導の下に戦時中にもかかわらず科学的な良心的な研究が行われた、というのが、岩波版の『中国農村慣行調査』なわけです。ところが、戦時中にこれに参加した法社会学者が書いているものを読みますと、そうではなくて、いかに中国人民を把握するか、支配するために把握するか、という観点で法社会学者を動員していることがわかります。

そういう意味で、戦後のこの再仕立てを剥ぎ取ってみますと戦時中の素顔が出てくるわけで、それを暴いていきたい、というのがこのテーマです。これは昨年の（日本）文化人類学会で発表したのですが、場所も悪かったし時間も悪かったし、多分テーマも悪かったと思うんですが、ほとんど聴衆がいまませんで（笑）私としては非常に残念でした。一昨年の外語大でやった時には非常に人が来てくれまして、非常に好評（笑）だったので、そのコントラストが私にはちょっとショックだったのですが（会場笑）渡邊欣雄さんをお願いして都立大学で話をさせてもらいました。これもかなり原稿ができていますので、比較的短い時間に書けるのではないかと思います。

<sup>48</sup> 一橋大学大学院社会学研究科地球社会専攻における定期セミナーで、1999年の第1回にはじまり、2005年12月で第33回を迎えた。清水先生は第26回で発表されている。

<sup>49</sup> 足羽與志子氏、一橋大学教授。

その次は、「モーガンを読む」<sup>50</sup>。これは一橋で大杉さん<sup>51</sup>が組織された、(日本文化人類)学会の関東地区研究懇談会の講演会シリーズで、最後の時に私がやったものです。詳しくは触れませんが、まあ、今はほとんど読むことのない人類学の古典であるモーガンの『古代社会』をですね、アメリカ合衆国史として読んでみたらどうか、というのが私のアイデアです。実際、モーガンの関心というのは、多分イロクオイ同盟から合衆国へという合衆国史が頭の中にあっただけではないかというのが私の想定です。

### 人類学者のアンダマンに関する知識：ラドクリフ＝ブラウンの調査

これ<sup>52</sup>は私が人類学史、日本の人類学を追いかけている時にですね、ヤン・ファン・ブレメンさんに仲介された形ですけれども、日本の人類学史を非常に精力的に追究されている中生勝美さん<sup>53</sup>と知り合いになりまして、彼が民博の地域研究企画交流センターで臼杵陽さん<sup>54</sup>とともに主催していた研究会がありました。そこで一度話をさせてもらったんですけれども、彼はその民博の研究会にあわせて国際シンポジウムを組織されました。そのシンポジウムに参加しないかという誘いをもらいまして、「旧日本植民地と人文社会諸科学：東アジア人類学と植民地主義」というタイトルのシンポジウムです。それで中生さんから打診をもらいましたので、私は是非アンダマンについて書いてみたいと答えて、形になったものです。

何でアンダマンなのかというのは不思議に思われるかと思いますが、私にとってはアンダマンというのは二つのルートでもって結びつく対象でした。一つは、ラドクリフ＝ブラウンとの関係です。人類学者でアンダマンといえば当然ラドクリフ＝ブラウンなわけで、あるいは人類学者のアンダマンの知識というのはほとんどラドクリフ＝ブラウンで終わっていると思うんですね。ただし、ラドクリフ＝ブラウンに関連して最初からアンダマンに行ったのではなくて、実は私がラドクリフ＝ブラウンを最初に追いかけたのはオーストラリアについてでした。

もう 30 年近く前にニーダムが言っていることですので、多分みなさんはほとんど知らないと思うのですが、ニーダムがラドクリフ＝ブラウンについて非常にしつこく追及しています。ラドクリフ＝ブラウンはオーストラリアの調査に 1910 年くらいに行っているんで

---

<sup>50</sup> 「モーガンを読む：「合衆国」史としての『古代社会』」(日本文化人類学会・関東地区研究懇談会特別連続企画『未知の知をひめた古典』第 6 回、一橋大学、2005.11.26)

<sup>51</sup> 大杉高司氏、一橋大学助教授。

<sup>52</sup> The Andaman Islands: A historical intersection of colonialism, nationalism, imperialism, post-colonialism and anthropological primitivism. (JCAS Symposium, Colonial Studies and Social Sciences in East Asia: East Asian Anthropology and Colonialism、国立民族学博物館地域研究企画交流センターシンポジウム「旧日本植民地と人文社会諸科学——東アジア人類学と植民地主義」(2005.12.16-17))

<sup>53</sup> 中生勝美氏、東洋英和女学院大学教授。

<sup>54</sup> 臼杵陽氏、日本女子大学教授、元国立民族学研究所地域研究企画交流センター教授。

すけれども、彼が現地のデージー・ベイツという女性のアマチュア人類学者の集めた資料を剽窃しているのではないか、ということを書いた。これは一種のスキャンダルなわけで、アメリカのマーガレット・ミードに並ぶ British Social Anthropology のスキャンダルなわけですが、イギリスではとても大きく暴くことはできなかったようで、ニーダムはさんざん叩かれました。いつの間にか沙汰やみになっているんですが、イソベル・ホワイトという人が、その二人の、ニーダムとラドクリフ＝ブラウンのことに、あるいはデージー・ベイツについて、更にしつこく追いかけていたりしているので、私も興味をもっていくつか読みました。1910年に、生物学者で小説家でもあるグラント・ワトソンとラドクリフ＝ブラウンの二人でオーストラリアに調査に行きます。その二人を案内したのがデージー・ベイツという現地のアマチュア人類学者でした。

ベイツは現地について非常に詳しいわけですが、アマチュアですので理論的なことは全然わからない。ラドクリフ＝ブラウンからみると、全く理論的に成っていないわけで、彼は最初から見下して馬鹿にしていたんですね。でも彼は、ベイツが書いたノートをしっかりいつも手元に置いて、それを見ながらサーベイをしていた、要するにベイツが集めた資料を自分で確認したかったらしいんですね。彼は最初、ベイツに案内されて先住民のキャンプに行くんですが、そこに盗賊という嫌疑をかけて警察が乱入してきまして、集まっていたアボリジニがみんな散っちゃうという出来事に遭遇します。要するに、普通に歩いていたのではアボリジニに会えない、現地に詳しいベイツに案内してもらってもうまくいかない。彼はそういう状況を見たんだと思うのですが、西オーストラリアの海岸からちょっと離れたところに小さな島があって、そこに性病患者を収容する収容所がありました。「ロック・ホスピタル」という名前で行われています。ハンセン病患者も隔離した病院に押し込めていましたけれども、そういう時代ですね。性病についてもそういう施設をつくっていたわけです。ラドクリフ＝ブラウンはそこに行ったんですね。そこに行くと、性病者が集められていますので、いろんな部族のアボリジニがいるわけです。そうすると居ながらにしていろんな部族からの情報が集まる。そこで確か3ヶ月くらい彼はいるんですね。そのあと、デージー・ベイツと喧嘩別れして、彼はしばらくまた大陸の方のアボリジニの間を歩いて、それからイギリスに帰る。そして、確か「3つの部族」という論文を書くんですが、それが彼のオーストラリアに関する最初の大きな論文になっていくという経緯があります。

それで、性病者の強制収容所に彼が行ったというのは、非常に奇妙というか、いかにも奇矯な行動なわけで、何でなんだろうと私は考えていたんですけども、そこで得た解答はですね、アンダマンだったわけです。

『アンダマン島民』の序文でもそうですし、もう一人の人類学者である E. H. Man のイントロダクションを読むともっとわかりますが、アンダマン島では植民地統治の過程でイギリスは流刑地をつくるのですが、流刑地をつくっていきますと、伝染病を持ち込んでア

アンダマン島民は急速に人口を減らすんですね。またそのアンダマン島民というのは非常に凶暴な、外来者を徹底して殺すということで有名だったのですが、植民地統治者はそういう凶暴なアンダマン島民に手を焼いて、しかも人口が減っていくというのにも手を焼いて、対策として「アンダマン・ホーム」というのをつくります。森林の中で出会ったアンダマン島民を捕まえてきて、アンダマン・ホームに強制収容するわけですね。そこで衣食を与えて、tame、飼い慣らす。その管理者は飼い慣らすためにそのアンダマン島民の言葉も学ばなきゃいけないわけで、否応なく人類学者になっていくわけです。そういう形で捕獲してきたアンダマン島民を飼い慣らす役割をしたのが、E. H. Man でした、彼が最初にアンダマン島についての民族誌を書くんですね。そういう歴史がありました。

ラドクリフ＝ブラウンが行ったところには、もうそういう強制収容はやめていて、それでもアンダマン島民はずっと人口を減らしてしまっていたので、すっかり依存的になってですね、アンダマン・ホームが与える食事、あそこに行けば食事にありつけるということで、やって来るわけですね。それで、恐らくですけども、ラドクリフ＝ブラウンは、アンダマン・ホームを拠点にして、やって来るアンダマン島民から情報を得て、それで *Andaman Islanders* を書いたんじゃないかと、それが私の想像なわけです。そうすると、ラドクリフ＝ブラウンは、アンダマンでやった経験をオーストラリアでやっているんだと、だから性病のいる島に行ったんじゃないか、これが私の想像なんです（笑）。

### 日本占領下のアンダマン

ラドクリフ＝ブラウンということでアンダマン島に私の頭では結びついていたんですが、ところがもう一つ、戦時人類学を追いかけていくと、ここにもまたアンダマン島が出てきたわけです。これには私も本当にびっくりしたんですけども、アンダマン島というのはインド領でした、ニコバル島と共にベンガル湾にあるインド領、インド領にはビルマも入っていますけれども、ビルマじゃなくて本体の方のインド領の一部なんですね。

第二次大戦で、日本がずっとマレーに侵略して、侵攻して、ビルマまで行くんですが、同時にアンダマン島とニコバル島を占領するわけです。ですから、アンダマン島とニコバル島というのは日本が戦時中に占領していた唯一のインド領だったんですね。ただし、島でした、すぐ日本海軍は補給力を失って持久戦を強いられます。それで、もともと食料で自給ができていなかった島に、現地の人たちに匹敵するような数の日本の軍人が入ってきて、食料の補給がないわけですから、これはもう、いかにして食いつないでいくかというのは大問題になります。日本の軍人にとっての一番の問題は食料の生産でした、島にいる人たちを動員してですね、サツマイモとかなんかを一生懸命植えてそれなりの持久力というのは確保していくのですが、その過程でも先が見えてきて、だんだん備蓄が減ってくるということが見えてきましたので、ほとんど戦争が終わる間際ですが、食料供給の苦勞を減らすために日本の陸海軍は現地の人間を、ええ・・・なんて言うか・・・人口を減ら

す、物理的に減らすという策に出ます。

形の上では村の人間を囲い込んで、離島に送ったんですね。それで食料補給は、なし、と。向こうへ行って食料を調達しなさい、というのが建前です。でも無人島ですから食料はありません。しかも、陸軍と海軍が別々にやったんですが、陸軍の方では後始末が面倒だからというので、島に送って揚げたところでみんな虐殺してしまったらしいんです。海軍の方は何度か食料を補給したというんですが、5、6百人、まあ人数ははっきりしないんですけども、5、6百人の人たちをですね殺してしまうという、そういう出来事まで起こしています。

そういう意味で、アンダマンというのは、第二次大戦中の日本のこの占領政策の中でも、最も苛烈な経験をしたところなんですけど、そのアンダマン島についてですね、平野義太郎が、いかにここが軍事戦略上重要なところであるかということを書いていて、しかも彼は非常に精力的な学者で、アンダマンの歴史、セポイの、あの「大反乱」を鎮圧したあとイギリスが流刑地を求めなければいけなくて、それでアンダマンに流刑地をつくっていったんだと、そういう歴史をちゃんと書いているんですね。私が今まで（日本語で）読んだアンダマンについての記述の中で、歴史に言及して一番よく書いているのは、この平野義太郎の戦時中の短いものですけども、そういう文章だったのです。

### **アンダマンというところ：人類学者が見てこなかった歴史と現在**

そういう意味で（日本人として）アンダマンを見てみますと、まず日本が占領しました。その前にイギリスはペナル・コロニー（流刑地）として占領しているわけですね。それが開拓のはじまりです。ペナル・コロニーであるということは、ナショナリズムからしますと裏返して、ここがインドの国民主義、ナショナリズムを鎮圧する拠点になるわけです。ここには本当に『監獄の誕生』に登場できるような、非常に立派なパノプティコンの刑務所の記念碑的なものがつくられていまして、その刑務所と併せて、アンダマンというのはインドのナショナリストの間では、「インドのバステューユ」と呼ばれていた。要するにインドの国民運動を弾圧するイギリスの権力の象徴だったわけです。そうすると、アンダマンというのは、イギリスからすると「大反乱」を鎮圧してつくった植民地の一環で、ナショナリストからすると「インドのバステューユ」で、日本からするとそのインドを解放するために日本が占領したところだと。しかも日本はチャンドラ・ボースにやがてこのアンダマンとニコバルの施政権を渡すと、チャンドラ・ボースの自由インド臨時政府に渡すと約束しているんです。実際、チャンドラ・ボースからリエゾン・オフィサーが派遣されまして、これが民政に参加していたりする。そうすると、日本の大東亜共栄圏イデオロギーからすると、インドをその西洋の植民地主義から解放する拠点だったわけです。

戦後はインドが独立するわけですけども、ここはここで逆に軍事基地化します。そういう風にして、外部の植民地主義とか帝国主義とかインド・ナショナリズムとか、インド

の独立後のナショナリズムとか、さんざん寄ってたかって歴史をつくってきているわけですが、その中で一貫してですね、すべてのエージェントが多かれ少なかれ視野の片隅においていたのがアンダマン島民なわけです。

このアンダマン島民というのは、そういう意味で、一方で外部のグローバルな影響力を受けた最も「未開」な人たちの典型みたいなものですが、他方アンダマン島民の姿勢というものが非常に面白くてですね、先ほど見たように、イギリスの統治は非常にホスタイルなアンダマン島民を手なずけるために「アンダマン・ホーム」をつくるわけですが、こういうプロセスはアンダマン島民を二つに分けていきます。要するに、自分たち植民地統治に馴染んでくる「フレンドリーな」アンダマン島民と、「ホスタイルな」アンダマン島民と、二種類に分類していくんですね。それで、すべての「ホスタイルな」アンダマン島民を「フレンドリーな」アンダマン島民に切り替えていけば、これで tame というかアシミレーション、植民地統治は完成するわけです。

ところが、アンダマン島民の方では、「ホスタイルな」方は頑強に「ホスタイルな」ままの姿勢を保ってしまっていて、現代に至るまで「ホスタイルな」な姿勢を保っている。インドの植民地統治(笑) 独立したインドを植民地勢力とって良いかどうかは問題ですが、まあでもアンダマンに関する限りでは植民地勢力だったと思うんですけども、アンダマン島民をいかに手なずけるかということ、いまだに真面目にやっている。それに対して、アンダマン島民の「ホスタイルな」方はいまだに頑強に「文明化」を拒否して「プリミティブ」なままに維持している、そういう場所なわけです。

こういう歴史を見たらうえて人類学を見てみますと、人類学者はアンダマン島民と言いますとまずラドクリフ＝ブラウン、それから E. H. Man、それから多分、二人の論文に依拠して構造主義的に分析したリーチの論文ですね。ほとんどこれしかないと思うんですけども、要するに人類学者は、こういう苛烈な歴史を生きている先住民を見ていながら、ほとんどその歴史を見ないで、ほんの昔の文化の、なんていうか、サルベージ人類学の頃に描いた人類学の像だけで知っているわけで、このコントラストも非常に、人類学にとって、まあ私にとっては非常に大きな発見で、人類学っていうのはやっぱりこれはダメだ(笑) っていうか、これではとてもダメだっていう思いが強いんですね。そういうことを、このアンダマンについては書いてみたいと思っております。

### フィールドノート：過去、現在、未来をむすぶ

それで話が全て終わればいいんですが、実は私にはもう一つ大きな課題がありまして、それは、調査です。1975年からはじめて、先ほども言いましたように、調査を続けているんですが、いろんな理由でですね、一番大きいのは私が怠慢だったということだと思っておりますが、まだフィールドノートのほとんどが眠ったままでして、これを何とかしないと、なんていうか、ポナペ(ポーンペイ)の人にも申し訳ないし、まあ、まだ「死ぬ」という

言葉をつかうのは早すぎますが、死ぬに死ねないという(笑)、そういう感じです。

もう 30 年たっていますので、その初期の頃にお世話になった人たちはほとんどもう亡くなっています。その子どもの世代か孫の世代になってしまっていて、で、最近行ってもですね、私のことを知っている人たちも非常に少なくなっていました。そういう意味で、ノートを開くと、これはもうノートを開いて読むこと自体が非常にノスタルジーな世界です。一時期、ノスタルジックな民族誌っていうのは、ロサルドですか？言ったの。サルベージ人類学の代名詞みたいなものですが、私はそれを地でやりたいと(笑)。もうノートを開くこと自体が非常にノスタルジックですので、ノスタルジーをそのままベタベタに(笑)した民族誌を書いてみたい、これがまあ私の最後の目標です。

もう 2 時間になってしまいました。なんて言うか・・・私にはこういうことを思い出すのは、結構それなりに楽しかったですけれども、みなさんに楽しんでいただけたかどうかはちょっとわかりません。今日お配りしたのものの中にはですね、ところどころ個人的なことも書いてあります。それで、それを知らない人には、面識のない人にはほとんど意味のないことなんですけど、まあ知っている人にはですね、例えば祖父江先生とか、大林先生とか、石川榮吉先生とか、知っている人には、ああそうかっていう風に納得してもらえないかと思います。

まとまった話ではありませんでしたが、どうもありがとうございました。(了)

(編集総責任者：古川優貴<sup>55</sup>)

\*本稿は、2006 年 3 月 9 日に一橋大学で行われた清水昭俊先生の最終講義の録音を書き起こし、それに項目立て等の編集を加えたものである。また、本文中の丸カッコ内の表記、脚注は清水先生の監修による。

---

<sup>55</sup> 一橋大学大学院博士後期課程。

## 略歴

1942.08	中華民国上海特別市で出生
1961.04 ~ 1965.03	東京大学教養学部 (教養学科文化人類学分科卒業、教養学士)
1965.04 ~ 1967.03	東京大学大学院社会学研究科文化人類学専門課程修士課程 (社会学修士)
1967.04 ~ 1974.04	東京大学大学院社会学研究科文化人類学専門課程博士課程
1972.04 ~ 1974.03	国際基督教大学教養学部 非常勤助手
1974.06 ~ 1978.09	千葉大学工学部 助手
1978.10 ~ 1991.03	広島大学総合科学部 助教授
1979.04 ~ 1986.03	広島大学大学院地域研究研究科担当
1986.04 ~ 1991.03	広島大学大学院社会科学研究科担当
1989.03 ~ 1990.01	Department of Anthropology, London School of Economics and Political Science, academic visitor.
1991.04 ~	国立民族学博物館 助教授
1991.04 ~ 1991.09	広島大学総合科学部 助教授 (併任)
1991.10 ~	総合研究大学院大学文化科学研究科 助教授 (併任)
1992.07 ~ 2000.03	国立民族学博物館 教授
1992.08 ~ 2000.03	総合研究大学院大学文化科学研究科 教授 (併任)
1994.04 ~ 1995.03	総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻 専攻長
1995.04 ~ 1996.03	総合研究大学院大学文化科学研究科 研究科長
1994.04 ~ 1996.04	総合研究大学院大学 評議員
1997.02 ~ 1997.07	北京日本学研究中心 センター 派遣教授
1998.11 ~ 1999.02	Department of Ethnic Studies, College of Social Sciences, University of Hawai'i at Manoa, visiting professor
2000.04 ~ 2006.03	一橋大学大学院社会学研究科 教授

この間、島根大学、大阪大学人間科学部 (2 度)、大阪大学文学部、お茶の水女子大学、熊本大学、千葉大学、静岡大学、筑波大学、九州大学、北海道大学で非常勤講師として集中講義を行った。

## 印刷刊行物および展示

- 1965 (書評)「Clifford Geertz, *Peddlers and princes*, Chicago, 1963」『東南アジアの民族と文化』1, 59-63. 東京: 東京大学東南アジア研究会.
- 1968a 「人類学的調査についてのノ - ト」『東南アジアの民族と文化』2, 49-64. 東京: 東京大学東南アジア研究会.
- 1968b (共著)「出雲調査短報」『民族学研究』33(1), 77-85. (井上兼行との共著)

- 1968c (書評) 「トール・ハイエルダール著 ポリネシアへの海上の道 *Sea Routes to Polynesia*」『学燈』65(7), 76-77. 東京: 丸善.
- 1970 「《家》の内的構造と村落共同体 出雲の《家》制度・その1」『民族学研究』35(3), 177-215.
- 1972a 「婚姻」『グランド現代百科事典 9 コス - シェク』pp. 212-214. 東京: 学習研究社.
- 1972b 「《家》と親族: 家成員交替過程 出雲の《家》制度・その2」(正)『民族学研究』37(3), 186-213.
- 1973a 「家庭イデオロギ - 批判」『思想の科学』14, 15-36.
- 1973b 「《家》と親族: 家成員交替過程 出雲の《家》制度・その2」(続)『民族学研究』38(1), 50-76.
- 1974a 「人類 と にんげん のあいだ」『思想の科学』31, 99-109.
- 1974b 「レヴィ = ストロ - ス『親族の基本構造』と北京の晩餐会」『講座 家族月報』6, 6-8. 東京: 弘文堂.
- 1974c 「火の民族学」大林太良編『日本古代文化の探求 火』pp. 11-99. 東京: 社会思想社.
- 1975a 「婚姻と家族の展開 家族・社会・共同体の構造」『伝統と現代』33, 102-115.
- 1975b 「村武精一著『家族の社会人類学』をめぐって」『民族学研究』40, 261-265.
- 1975c (共著)「ミクロシネア・ポナペ島の生活とデザイン(2) ココヤシの用法に見るブリコラ - ジュ」『千葉大学工学部研究報告』52, 165-172.(宮崎清・片山陽次郎との共著)
- 1976 「石焼きをめぐるポナペ島民の生活文化複合」『社会人類学年報』2, 185-201.
- 1978a 「人生儀礼(1) 婚姻・出産など」船橋市教育委員会編『中野木の民俗』pp. 5-12.
- 1978b 「衣食住」船橋市教育委員会編『中野木の民俗』pp. 19-29.
- 1978c 「生活の諸相」石川栄吉編『現代文化人類学』pp. 27-88. 東京: 弘文堂.
- 1979a 『仲間』東京: 弘文堂. (原忠彦・末成道男との共著)
- 1979b 「コメント」『季刊人類学』10(2), 104-107. 東京: 講談社(京都人類学研究会)
- 1981a (書評)「山路勝彦『家族の社会学』世界思想社、1981」『民族学研究』46, 237-239.
- 1981b 「独立に逡巡するミクロネシアの内情 ポナペ島政治・経済の現況より」『民族学研究』46, 329-344.
- 1982 Chieftdom and the spatial classification of the life-world: every-day life, subsistence and the political system on Ponape. In *Islanders and their outside world* (ed.) Machiko Aoyagi, pp. 153-215. Tokyo: Rikkyo (St. Paul's) University.
- 1983a 「こしゃえとう コシャエ島」「ぼーんべいとう ポ - ンペイ島」ほか2項目 加藤周一編『新版大百科事典』東京: 平凡社.
- 1983b 「家族と身体の慣習」『家族史研究』7, 26-56.
- 1985a 「人類学における異文化理解」『地理科学』40, 47-51.
- 1985b 「ポ - ンペイ島の生活より」『太平洋学会誌』28, 50-57.

- 1985c Politics of encounter: a semantic analysis of guest-receiving behavior on Ponape, Eastern Carolines. in *The 1983-84 cultural anthropological research to Micronesia: An interim report* (ed.) Eikichi Ishikawa, pp. 39-63. Tokyo: Tokyo Metropolitan University.
- 1985d 「出自論の frontline」『社会人類学年報』 11, 1-34.
- 1985e 「日本の家」『民族学研究』 50(1), 97-111.
- 1985f 「出会いと政治 東カロリン諸島ポ - ンペイ島における応接行為の意味分析」『文化人類学』 1, 179-210.
- 1986a 「家、出自、類型論」『民族学研究』 50, 433-435.
- 1986b 「家・同族と父系出自集団」 竹村卓二編『日本民俗社会の形成と発展』 pp. 47-59. 東京: 山川出版社.
- 1987a 「家族」「コシャエ島民」「地縁集団」「火」「ポ - ンペイ島民」「ミクロネシア人」 石川栄吉ほか編『文化人類学事典』 東京: 弘文堂.
- 1987b (書評)「石森秀三『危機のコスモロジ ミクロネシアの神々と人間』 福武書店、1985」『民博通信』 35, 9-12.
- 1987c 「火の民族学」『C E L CULTURE, ENERGY AND LIFE』 1 (特集 火), 42-45. 大阪: 大阪ガス エネルギー・文化研究所.
- 1987d Feasting as socio-political process of chieftainship on Ponape, Eastern Carolines. In *Cultural uniformity and diversity in Micronesia* (Senri ethnological studies 21) (eds) Iwao Ushijima and Ken'ichi Sudo, pp. 129-176. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 1987e Kinship-based groups and land tenure on a Marshallese atoll. In *Cultural adaptation to atolls in Micronesia and West Polynesia* (ed.) Eikichi Ishikawa, pp. 19-41. Tokyo: Tokyo Metropolitan University.
- 1987f 『家・身体・社会 家族の社会人類学』 東京: 弘文堂.
- 1987g 「ウチの親族構造」 大林太良編『ウチとイエ』(古代の日本 11) pp. 77-110. 東京: 中央公論社.
- 1987h 「ポ - ンペイの『王様』と生活体系」『国際協力』 1987年9月号, 34-35. 東京: 国際協力事業団. 1987i 「ミクロネシアの伝統的文化」 石川栄吉編『オセアニア世界の伝統と変貌』(民族の世界史 14) pp. 203-28, 東京: 山川出版社.
- 1987j Ie and dozoku: Family and descent in Japan. *Current anthropology* 28(4), s85-s90.
- 1988a Chieftainships in Micronesia. *Man and culture in oceania* 3 (special issue), 239-252.
- 1988b 「ミクロネシアの社会」 見田宗介・栗原彬・田中義久編『社会学事典』 p. 843, 東京: 弘文堂.

- 1988c 「儀礼の外延」 青木保・黒田悦子編『儀礼 文化と形式的行動』pp. 117-145. 東京: 東京大学出版会.
- 1988d 「家族における自然と文化 (日本民族学会第 25 回研究大会分科会報告 3)」『民族学研究』 53, 98-102.
- 1988e (共著)「婚姻の民族学《シンポジウム》」『創造の世界』 67, 76-97 (江守五夫、河合隼雄、河合雅雄、作田啓一、比嘉政夫との共著).
- 1988f 「アニミズム」(pp. 44-46) ほか 10 項目 今村仁司編『現代思想を読む事典』東京: 講談社.
- 1989a 「ミクロネシアの首長制」 牛島巖・中山和芳編『オセアニア基層社会の多様性と 変容』(国立民族学博物館研究報告別冊 6) pp. 119-139. 大阪: 国立民族学博物館.
- 1989b (編)『家族の自然と文化』東京: 弘文堂.  
「はじめに」 pp. 1-4.  
「序説 族の自然と文化」 pp. 9-60.  
「あとがき」 pp. 222-229.
- 1989c 「『血』の神秘 親子のきずなを考える」 田辺繁治編『人類学的認識の冒険 イデオロギーとプラクティス』 pp. 45-68. 東京: 同文館.
- 1989d 「家族の情 愛情の社会的分布」『月刊アーガマ』 106, 50-61.
- 1990a 「ポーンペイの創世神話」 阿倍年晴ほか編『儀礼と伝承の民族誌』(民族文化の世界) 上) pp. 534-562. 東京: 小学館.
- 1990b (書評)「メルフォード・E・スパイロ、井上兼行訳『母系社会のエディプス フロイト理論は普遍的か』 紀伊國屋書店、1990年」『週間読書人』 4月30日, 4.
- 1990c (書評)「江守五夫『家族の歴史民族学 東アジアと日本 日本基層文化の民族学的研究 III』 弘文堂、1990年」『週間読書人』 6月18日号, 4.
- 1990d 「ミクロネシアの変貌 近代化とその裏側」『季刊オセアニア』 22 (1990夏号), 4-7. 兵庫: 日本オセアニア交流協会.
- 1990e 「広島大学国際シンポジウム『南太平洋諸国の今日的諸問題』」『日本オセアニア学会 NEWSLETTER』 38, 22-24.
- 1990f (書評)「明石一紀『日本古代の親族構造』 吉川弘文館、1990年」『比較家族史研究』 5, 103-112.
- 1991a 「コメント」 松原正毅編『王権の位相』 pp. 269-76. 東京: 弘文堂. (大谷裕文「トンガの王権儀礼 タウマファ・カバを中心として」に対するコメント)
- 1991b Modernisation and tradition in the Federated States of Micronesia. *Studies in social sciences* (Memoirs of the Faculty of Integrated Arts and Sciences II) 16, 331-349. Hiroshima: Hiroshima University.
- 1991c 「今どき『酋長』表現は不適切」『朝日新聞』 8月26日, 17. 東京: 朝日新聞東京本社.

- 1991d 「ポーンペイ人の複眼的な観方」『TOKK』234, 12-13. 大阪: TOKK 発行所.
- 1991e 「ポーンペイ人の海と陸」『月刊みんぱく』15(9), 15-17. 大阪: 千里文化財団.
- 1991f On the notion of kinship. *Man* (N. S.) 26(3), 377-403.
- 1991g 「流動する『国家』観 ミクロネシア 2 国の国連加盟と日本」『毎日新聞』10 月 31 日(夕刊), 9. 大阪: 毎日新聞大阪本社.
- 1991h 「火を切る道具」『月刊みんぱく』15(12), 12-13. 大阪: 千里文化財団.
- 1992a 「ミクロネシア連邦における近代化と伝統」畑博行編『南太平洋諸国の法と社会』pp. 133-150. 東京: 有信堂.
- 1992b Ethnocentrism and the notion of kinship. *Man* (N. S.) 27(3), 631-633.
- 1992c 「歴史、民族、親族、そして呪術」『民博通信』58, 84-92. 大阪: 国立民族学博物館.
- 1992d (書評)「西田利貞・伊沢紘生・加納隆至編『サルの文化誌』平凡社」『民族学研究』57(3), 369-373.
- 1993a 「性の秘匿が人間社会の家族を生んだ」『科学朝日』1993 年 2 月号, 22-25.
- 1993b 「永遠の未開文化と周辺民族 近代西欧人類学史点描」『国立民族学博物館研究報告』17(3), 417-488.
- 1993c 「性の慣習と身体の価値的分節 ポーンペイの事例より」須藤健一 / 杉島敬志編『性の民族誌』pp. 143-167、京都: 人文書院.
- 1993d (共編)『近代に生きる』(オセアニア 3). 東京: 東京大学出版会(吉岡政徳との共編). (共著)「はしがき」pp. i-ii (吉岡政徳との共著). 「近代と国家と伝統」pp. 3-19.
- 1993e 「マーシャル諸島共和国の憲法改正問題」アジア・太平洋マイクロステート研究会編『太平洋における非核と共生の条件』(IPSHU 研究報告シリーズ 22), pp. 81-101. 広島: 広島大学平和科学研究センター.
- 1993f 「シンポジウム 洗練と粗野」『月刊みんぱく』18(3), 18-19. 大阪: 千里文化財団.
- 1994a 1990 referendum on the constitutional amendments of the Republic of the Marshall Islands. In *The South Pacific in the era of changing world* (ed.) Yukio Satow (IPSHU Research Report 17). Pp. 107-142. Hiroshima: Institute for Peace Science, Hiroshima University.
- 1994b 「ココヤシの葉の籠」『月刊みんぱく』18(9), 12-13. 大阪: 千里文化財団.
- 1995a 「近代欧米文化人類学史点描」『人類学がわかる』(AERA mook 8), pp. 154-160. 東京: 朝日新聞社.
- 1995b (編)『洗練と粗野 社会を律する価値』東京: 東京大学出版会.  
「はじめに」pp. i-vi  
「価値と社会的秩序 序章」pp. 1-20.  
「名誉のハイアラキー ポーンペイの首長制」pp. 41-55.

- 「あとがき」325-326.
- 1995c 「課程博士授与までの研究指導体制」『民博通信』67, 64-74. 大阪: 国立民族学博物館.
- 1995d 「オセアニアの近代」田辺繁治編『アジアにおける宗教の再生 宗教的経験のポリ  
ティクス』pp. 423-431. 京都: 京都大学学術出版会.
- 1995e 「『歴史の継承』について」『フォーラム 学会名称変更提案関連資料 II』(『民族学  
研究』60 巻別冊) pp. 40-43.
- 1995f 「民族学と文化人類学 学会の改称問題によせて」『民博通信』70, 8-27. 大阪: 国立  
民族学博物館.
- 1995g 「敬語と礼儀と貢ぎもの」『月刊みんぱく』19(11), 15-17. 大阪: 千里文化財団.
- 1996a 「大学本部と文化科学研究科の動き」『民博通信』71, 103-108. 大阪: 国立民族学博物  
館.
- 1996b Current trends of out-migration from Kosrae and Pohnpei, the Federated States of  
Micronesia. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 20(4), 753-771.
- 1996c 「『人類』と『民族』のパラダイム転換」『フォーラム 学会名称変更提案関連資料 III』  
(『民族学研究』60 巻別冊 2), pp. 48-61.
- 1996d 「植民地的状況と人類学」青木保ほか編『思想化される周辺世界』(岩波講座文化人類  
学 12), pp. 1-29. 東京: 岩波書店.
- 1996e 「共同研究 周辺世界のゆくえ」『月刊みんぱく』20(9), 18-19. 大阪: 千里文化財団.
- 1997 Cooperation, not domination: A rejoinder to Niessen on the Ainu exhibition at  
Minpaku. *Museum anthropology* 20(3), 120-131.
- 1998a 「親族現象と人類学 学説史の回顧と現状」丸山茂・橋川俊忠・小馬徹編『家族の  
オートノミー』pp. 9-53. 東京: 早稲田大学出版局.
- 1998b 「日本の人類学」船曳建夫編『文化人類学のすすめ』pp. 111-133. 東京: 筑摩書房.
- 1998c 「博物館が語る歴史、語らない歴史」『月刊みんぱく』22(4), 15-17. 大阪: 千里文化財  
団.
- 1998d 「マーシャル諸島共和国の 1990 年憲法改正国民投票」佐藤幸夫編「世界史の中の太平  
洋」(太平洋世界叢書 1), pp.107-151. 国際書院.
- 1998e 「家族の謎 なぜ自然に基礎をおくのか」『比較文明』14, 6-17, 1998.
- 1998f (編)『周辺民族の現在』京都: 世界思想社  
「はじめに」pp. 1-14.  
「序章 周辺民族と世界の構造」pp. 15-63.  
「あとがき」pp. 286-287.
- 1998g 「文化人類学の可能性」『現代思想』26(7), 32-55 (太田好信、富山一郎との鼎談記録).
- 1999a 「慣習的土地制度の外延 ミクロネシアの比較事例から」杉島敬志編『土地所有の政  
治史 人類学的視点』pp. 409-428. 東京: 風響社.

- 1999b 「忘却のかなたのマリノフスキー 1930年代における文化接触研究」『国立民族学博物館研究報告』24(3), 543-634.
- 1999c (共編) *Anthropology and colonialism in Asia and Oceania* (eds) Jan van Bremen and Akitoshi Shimizu. Surrey, London: Curzon Press.  
(共著) Introduction: Anthropology in colonial contexts: A tale of two countries and some, pp. 1-10.  
Colonialism and the development of modern anthropology in Japan, pp. 115-171.
- 1999d 「シャカオ」『月刊みんぱく』23(7), 20-21. 大阪: 千里文化財団.
- 2000a Does anthropology exist in Japan? *Minpaku anthropology newsletter* 10, 5-8.
- 2000b The world system or local systems? National anthropologies in the West and Japan. In *Japan scholarship in international academic discourse* (ed. Pamela J. Asquith) (Ritsumeikan journal of Asia Pacific studies 6, special issue), pp. 101-116. Beppu: Ritsumeikan Center for Asia Pacific Studies, Ritsumeikan Asia Pacific University.
- 2001a 国立民族学博物館常設展示「オセアニア」内のテーマ展示「オセアニア先住民の文化運動」立案制作(林勲男、久保正敏、Peter Matthewsとの共同) 同テーマ展示「先住民の文化運動」内の「ハレ・クーアイ生協」展示立案制作および展示テキスト.
- 2001b 「日本の人類学 国際的位置と可能性」杉島敬志編『人類学的実践の再構築 ポストコロニアル転回以後』pp. 172-201, 世界思想社.
- 2001c 「ハワイ人の再生へ」「展示 ハレ・クーアイ生協」「歴史の記憶 ホノルルの景観を読む」「交錯する視線 ハワイ史の内と外」『季刊民族学』25巻3号, pp. 20-7, 28-29, 32-34, 64-67.
- 2001d 「日本における近代人類学の形成と発展」篠原徹(編)『近代日本の他者像と自画像』pp. 236-272. 東京: 柏書房.
- 2002a 「在米ポンペイ人の「9月11日」 カンザス・シティーのヤキュー大会」『季刊民族学』26(3), 107-115.
- 2002b 「ハワイのハレ・クーアイ生協」『月刊民博』26(12), 10-12.
- 2003 (共編) *Wartime Japanese anthropology in Asia and the Pacific* (eds) Akitoshi Shimizu and Jan van Bremen (Senri ethnological studies 65). Osaka: National Museum of Ethnology.  
(共著) Introduction, pp. 1-11 (Jan van Bremenとの共同執筆).  
Anthropology and the wartime situation of the 1930s and 1940s: Masao Oka, Yoshitarō Hirano, Eiichirō Ishida and their negotiations with the situation, pp. 49-108.
- 2004a (編)『太平洋島嶼部住民の移民経験』東京: 一橋大学社会人類学研究室.  
「はじめに」pp. iii-vi.

- 「カンザス市地域のポーンベイ人移民 移民コミュニティの形態と形成過程」 pp. 181-222 .
- 2004b 「清水昭俊『家・身体・社会』1987」p. 97-98、「清水昭俊編『家族の自然と文化』1989」p. 98、「清水昭俊編『洗練と粗野』1995」p. 99、清水昭俊編『周辺民族の現在』1998」p. 100、「ストッキング 編 *History of Anthropology*, 1983 - 」pp. 110-111、「ストッキング *After Tylor*, 1995」p. 112、「ブレーメン&清水昭俊編 *Anthropology and Colonialism in Asia and Oceania*, 1999」p. 198-199、「ラドクリフ=ブラウン『未開社会における構造と機能』1952」p. 256、「ラドクリフ=ブラウン *The Andaman Islanders*, 1922」p. 676、小松和彦・田中雅一・谷泰・原毅彦・渡辺公三(編)『文化人類学文献事典』東京：弘文堂 .
- 2005 Commemorating Jan van Bremen: A personal memory. *Japan Anthropology Workshop newsletter* 38, 10.
- \* \* \* \* \*
- 2004 「戦時の科学動員と社会学者 平野義太郎の『民族=政治学』と岡正雄の『民族研究』」 (一橋大学社会学研究科地球セミナー、2004.07.07)
- 2005a 「戦時期の中国農村社会研究 『支那農村慣行調査』を中心に」 (東京都立大学社会人類学研究会第 691 回研究会、2005.09.22)
- 2005b 「モーガンを読む：「合衆国」史としての『古代社会』」 (日本文化人類学会・関東地区研究懇談会特別連続企画『未知の知をひめた古典』第 6 回、一橋大学、2005.11.26)
- 2005c The Andaman Islands: A historical intersection of colonialism, nationalism, imperialism, post-colonialism and anthropological primitivism. (JCAS Symposium, Colonial Studies and Social Sciences in East Asia: East Asian Anthropology and Colonialism、国立民族学博物館地域研究企画交流センターシンポジウム「旧日本植民地と人文社会諸科学 東アジア人類学と植民地主義」、2005.12.16-17)
- 2006 「ハワイ人(カーナカ・マオリ)、アメリカ合衆国、国際先住民運動」 (国立民族学博物館地域研究企画交流センター共同研究『オセアニア諸社会におけるエスニシティ』2005 年度第 4 回研究会、2006.03.04、法政大学)